シャドー（1788-1862、ドイツ）

2020 年 2 月 23 日　説教「愚かな娘たちと賢い娘たち」

マタイの福音書 25 章 1~13 節

マタイの福音書は 24 章において、終わりの日についてのイエスの説教記事があります。今朝の個所はそれに関連したたとえ話です。

１．十人の娘達（1~4 節）

①十人の娘たち（1～2）**「そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。」**。天の御国を教えるのに、たとえが用いられます。ここに十人の娘がいます。花嫁の友でつきそいです。彼らは花婿を迎えようとしているのです。場所は花嫁の家の前だと考えられます。彼らは皆、燈火皿を持っていました。ところが十人のうち、五人は愚かで、五人は賢かったというのです。

②愚かな娘達（3）**「愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。」**愚かな娘たちはともしび皿は持っていましたので、当面の灯りは確保してきましたが、余分の油は用意していなかったというのです。つまり、ともしびの火を維持するだけの用意で、いざという時のための、油は携えていなかったのです。愚かな娘たちは、花婿が来ること関して、真剣に考えていなかったのかもしれません。このことを、深く受け止めていなかったのです。なんとかなるだろと思っていたかもしれません。

③賢い娘達（4）**「賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。」**一方、賢い娘たちは燈火皿とともに、その燃料である油を余分に用意していました。花婿が来るのが遅れても灯りをつけることができるようにしていたのです。彼らは、花婿が来ることについて、思慮深く受け止めていました。来られた時には、燈火をつけられるように備えていたのです。そこで、油を携えて出かけたのです。入れ物に油を入れて持っていくのは、面倒であったかもしれませんが、大切だとわきまえて実行したのです。

２．油が足りなくなった娘達（5～9 節）

①花婿の登場（5～6）**「花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうととして眠り始めた。ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と叫ぶ声がした。」**花婿はなかなか来ません。花婿が意図を持ってそのようにしたのかもしれません。待ちぼうけとなった十人の娘たちは、みな眠り始めました。イエス・キリストがゲッセマネの園で苦しみの祈りをしている時に、眠りこけていた弟子達のことが連想されます。夜中になりました。その合間に油は消費していきました。声が発せられました。「花婿がきたぞ。みんな、迎えに出ろ！」。24 章にあるように、盗人のように、気がつかれないように、突然とやってくるのです。

②皆起きて（7～8）**「娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』」**花婿が夜中にやって来たのですから、娘たちは眠気眼だったでしょう。それでも、急いで起き、自分のともしびを整えようとしたのです。ところが愚かな娘たちのともしびは皿は風前の灯です。もはや恥も外聞もありません。賢い娘達にお願いするしかありません。私達のともしびは消えそうですから、「どうか油を分けて下さい！」

③足りません（9）**「しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のものをお買いなさい。』」**分けてけてくださいと言われても、余分などありません。自分たちのともしび皿を明るくする油しかありません。そこで賢い娘たちは、「分けてしまえば私達の分まで足りなくなります。」日本人なら「すみませんね」が入るでしょう。「店に行かれて、油を求められてはいかがですか？」。賢い娘たちの率直な気持ちであったでしょう。

３．戸は閉められた（10～13 節）

①花婿が来て（10）**「そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸が閉められた。」**愚かな娘達は急いで油を買いに出かけました。しかしです。店に行っている間に、花婿は来てしまったのです。油の用意をしていた賢い娘たちは、灯りを携えて、花婿と一緒に婚礼の祝宴に向かったのです。そして、彼らが入り終わると、その祝宴場の戸は閉められたてしまったのです。

②開かない戸（11~12）**「そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください。』と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたのことを知りません。』と言った。」**愚かな娘達は油を手に入れてもどりました。ところが戸は閉まっていました。必死で叫びました。ご主人さま！！開けて下さい！しかし、その応えはつらい内容でした。「確かなところ、私はあなたがたのことを知りません。」ここには、もはや人間の情などでは変わらない、決然たる御意志というものがそこにあります。

③誰も知らない（13）**「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。」**黙示録 3:2 で「目をさましなさい」と学びましたが、ここでは「目をさましていなさい」とあります。言うまでもなく霊的眼のことです。その日、その時とは、24 章からの継続と考えられ、主の再臨のことです。「人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗ってくるのをみる」(24:30)「ただし、その日、その時がいつであるのかは、誰も知りません。・・ただ父だけが知っておられます」（24:36）と同じメッセージです。

《結論》

イエス・キリストはたびたびたとえ話を通して、真理を伝えてくださいました。今朝は当時の人々にとっても、親しみのある結婚式がたとえに用いられています。ともしびは花婿を迎えるにあたって、花嫁の友が必要なしるしであり資格でした。これがなければ、婚姻の場に参加することができなかったのです。

私どもが 38 年程前に結婚をした時には、神学校の礼拝堂で式が行われ、そのホールで祝会がもたれるという素朴なものでしたから、誰にでも参加していただくというものでした。もっとも、親戚には配慮して、その後に別の席を設けるということをしましたが、結婚式に誰を招くのかというのは、時には悩ましい問題となります。1967 年の映画に「招かれざる客」というのがあり、医学博士である黒人男性（シドニー・ボアチエが俳優）と白人女性の結婚が取り扱われました。黒人差別が今以上に強い時代だっただけに、問題作となったわけです。この場合の壁となったのは人種でしたが、今朝のたとえ話も人間的な差別なのでしょうか。いいえ、それは根本的に違います。

今朝のたとえ話は、人間が人間を差別するといったものではありません。愚かな女たちが戻ってくる前に、戸が閉められる点は、人間的にいえば、遅れた娘たちも入らせてあげれば良いのではないかとも思われます。しかし、神のなさることには人間の情は通じません。。ノアの箱舟の話でも多種の動物たちとノアと家族が箱舟に入った後に、「主は、戸を閉ざされた」（創世記 7:16）とありますが、厳然たる主のご意志がそこにあるのです。

ところで、このたとえ話は、何を語ろうとしているのでしょうか。このたとえ話に出て来る花婿とはキリストのことです。そして、終末の出来事のなかに、再臨のキリストは、この話における花婿のように突然とやってこられるというのです。それでは、この話の賢い娘たちが、油を携えるというのは何を意味しているのでしょうか。ローマ人への手紙 8 章には、キリストを信じる者には、その人の内に聖霊が住んでくださるということが諄々と論ぜられています。そうです。キリストを信じて歩む人には、聖霊という油が注がれるのです。賢い娘達のように、聖霊に導かれながら歩む者たちには、主の豊かな恵みが与えられるのです。ところが、うっかりしていると、肉の働きに従ってしまい、愚かな娘たちのように油を忘れてしまうことになりかねません。

「目を覚ましていなさい」（13 節）とあります。キリストから目を離さないように気を付けたいものです。「目を覚ましなさい」（黙示録 3:2）と叱られ、目を覚ました者もいるでしょう。その人は、継続して目を覚まし、油を用意するつもりで、祈りと御言葉をいただき、

日々に歩んでいきたいものです。